

昭和 10 年代における文芸時評（I）

——総合雑誌『中央公論』『改造』『文藝春秋』『日本評論』

松本和也

1

近年、文芸時評なるものへの関心が高まっているように見える。

もとより、華々しい注目を集めているというのではないが、しかし日本近代文学研究の領域においては、発表当時の作品受容を知るための、あるいは、文学場における制度や評価軸を探るための同時代評－手がかりとして等々、その歴史的意義に関心が払われるようになってきた。こうした現状に至るまでに、1) 1990年代以来、同時代の視座からの文学研究の持続的な展開、2) モノとしての書籍をめぐる出版文化研究の隆盛、3) 『文芸時評大系 明治篇／大正篇／昭和篇』全73巻・別巻5（ゆまに書房、2005-2010）の刊行、などがゆるやかなつながりをもちつつ、この背景をなしているように思われる。3) に関わっては、いくつか関連する記事も出た。編集に携わった藤田三男は、《日本固有の批評スタイル》⁽¹⁾として文芸時評を捉え、《近現代文学の同時代評の「埋れかかった底辺」を記録することこそ文学研究の根源なのではないか》⁽²⁾と述べている。ただし、やはり編集に携わった中島国彦がいうように、文芸時評を集積するという書籍編集においてすら、《いったい何が「文芸時評」なのか、という難しい問題》⁽³⁾が浮上してくるのは必至である。試みに、事典記述において文芸時評がどのように説明されていたか、ここで確認しておこう。

わが国におけるいわゆる文芸時評とは、一般に、評者の文学理論にもとづく理論的追求や現代的意義の闡明などよりは、むしろ月々の文芸雑誌その他に発表される文学作品をただちにとりあげ、その内容の紹介に併せてこれが功罪、価値をめぐっての具体的な論評を行うものをいう。したがってこれは一種のクロニクルとしての意味をもつと同時に、その半面当の評者自身にとってもその作品にたいする究極的な解釈や価値の決定とはかならずしも一致しない場合がある。また同時期の文壇ジャーナリズムの動向やこれをめぐる読者の好尚と密接に結びつくところもあって、それが「現場主義」（平野謙）なる語で評され、また「文壇下廻りの賃仕事」（十返肇）などという批評家自身のアイロニカルな言葉があるゆえんでもあるが、これはかならずしもその批評文学としての存在意義の軽視を意味するものではなく、この文芸時評がわが近代現代文学の展開の上で果たしてきた大きな役割を否定することはできない⁽⁴⁾。

同文では上の導入につづき、文芸時評の端緒－成立から時代ごとの特色、主要な書き手などが概説されていくが、これに対しては、谷沢永一が記述の《偏頗》⁽⁵⁾を厳しく難じている。その谷沢は、《文芸時評とは文壇のなかで互に通じ合う批評を意味する》⁽⁶⁾と要約しつつ、その起源を検証しては、次のような暫定的結論を提示している。

- (一) 文藝時評という標目を発案したのは大町桂月である。この呼称が世間に発表されたのは明治三十三年十二月である。しかし彼自身には六カ月しか執筆の機会がなかった。
- (二) 明治三十九年四月十五日、『文章世界』第3号から田山花袋が「時評」欄を設置し、四十二年の末に及んだ、これが継続的な文藝時評の嚆矢である。

そして明治三十九年五月六日から、正宗白鳥が『読売新聞』に「文藝時評」の連載を始めた。ただし『読売新聞』は文学新聞であるから、白鳥は明治三十四年十二月二日から続々と評論を掲載しており、それは当然に時評であり、三十九年五月になって新しい看板を掲げたのであるから、実質上は白鳥の時評が、明治三十四年十二月二日に始まったと見做し得る⁽⁷⁾。

このような起源をもつ文芸時評は、その後、文学場において制度化されていったが、その具体的な内実や機能については、大澤聡が次のようにまとめている。

文芸時評は明治後期に誕生した（一九〇〇年前後）。早々に形状を整え定着していく。新作の内容紹介と価値判断を主要な責務とする。担当者には反射能力が問われた（速報性の優先）。評定によって、反応や承認に飢えた作家たちを一喜一憂させる（名誉などの象徴的報酬）。のみならず、作家の行く末をも現実的に左右する（生殺与奪権の掌握）。おのずと権威機関と化した。序列による閉鎖空間を形成していればこそ、権威付与や相互認証の機能が要諦をなす。大宅壮一「文通ギルドの解体期」（一九二六・一二）は、作家が「互に褒め合ひ、問題にし合つて「有名」を維持して行く」文壇の慣習を摘出した（いわゆる「内輪褒め」の「内輪」の境界画定）。その漠たるシステムを洗練させ制度化したものが文芸時評だ。評価行為は正負両系の互酬的循環を起動させるだろう。その贈与性ゆえ、文壇の社交ツールとして時評が運用されもした（集団内部の人間関係のメンテナンス）。そこにいわゆる文壇政治の力学が発生する。特殊閉鎖的な利益集団と結びつく可能性も十分あった。対象が新人であればリクルーティング機能が働く。こうした共同体的作法の自然成長は文壇が長期間かけて成熟したサークルであることを意味している⁽⁸⁾。

こうした見方によれば、単なる文学史上の慣習や記録としてばかりでなく、さまざまな時期における文学場の動態に迫るための重要な手がかり＝《歪んだガラス》（C・ギンズブルグ）として、文芸時評を捉え直すことができるだろう。すでに、『文学者につくられる』（ひつじ書房、2001）の著書がある山本芳明は、《文芸時評を歴史的に分析していったときに、否応なく気づかされるのは、「読みのモード」の不安定さ》だと指摘した上で、そこから《短期間に〈変動〉する「読みのモード」によってたわいもなく動く文芸時評の流動性》や《連続面よりも断層の方が際立つ文学的言説の編成状況》⁽⁹⁾がみえてくるのだと指摘している。

こうした意義に鑑み、各紙誌における、文芸時評（および、それに類するもの）の執筆者、掲載状況、分量、レイアウト等について基礎的なデータを整理し、とりあげられた作家・作品・トピックなどの内容も含めた具体的な変化－盛衰の分析のための基盤を整えることを、目下、企図している。というのも、『文芸時評大系』全73巻からして、すべての文芸時評を収録し得ていないという大前提があり、このことに関わって『文芸時評大系』の編者として、中島国彦は次のような警句を発してもいる。

わたくしが明らかにしたかったのは、作品評をはみだしたものは、概して今回の『文芸時評大系』には紙幅の都合で割愛されていること、また本大系に収録されていなくても実際の雑誌や新聞には、まだまだ注意すべき関連文章がその周辺に隠れている、ということである。『文芸時評大系』は、あくまでも研究・調査の起点である。たしかにこれまでより、時評の収録は量的には進んでい

る。調査の省力には、確実にしろ。しかし、それだけに頼るのは、やはり危険である。現物に戻り、改めて自分の眼で確かめることが必要であろう⁽¹⁰⁾。

従って、『文藝時評大系』刊行以後にあってもなお、文学研究において何かしらのかたちで文芸時評を扱うためには、第1に、資料体の設定に関して、研究テーマに応じた戦略的な検討対象の設定と周到的配慮とが要請される。第2に、上記に即して、ていねいな調査・分析を行うと同時に、その対象とする文芸時評が孕む可能性／限界をふまえた上で、論を構想していくことが必要とされる。もとより、上の諸設定を、当該論文の問題意識－テーマに応じて適宜調整していく必要があるのはいうまでもない。

にもかかわらず、文芸時評については、漠然と総合雑誌・文芸雑誌・新聞に掲載されていた／いることまでは広く知られていても、その具体的な内実（どの媒体に、どのようなスペースやレイアウトで、どれくらいの期間、誰が書いたのか、等々）は、思いのほか知られておらず、情報としても整理されたかたちでは提示されていない。もとより、その掲載状況について全面的な調査を試みようとするなら、まずもって資料体の全体をどのように設定するかという問いばかりでなく、既出の、「何を以て文芸時評とするか」という難問をはじめ、物理的／原理的な困難に見舞われるのは必至である。そこで本稿では、いくつかの条件によって調査対象を絞りこんだ報告－考察を行うことにしたい。

第1に、近年における論者の興味関心——昭和10年代における文学場の多角的な検討⁽¹¹⁾——に即して、調査期間を昭和10年代（雑誌の刊行表記で、昭和10年1月号～戦時下における廃刊まで、各種増刊号等は拾わない）とし、その消長に注目したい。第2に、文芸雑誌、新聞学芸欄を念頭に置きながらも、まずは調査対象媒体を主要総合雑誌とする。具体的には、『中央公論』、『改造』、『文藝春秋』、『日本評論』の4誌——4大総合雑誌とする。同時代においても、新居格「総合雑誌論」（『日本評論』S10.11）で《今日わが国の総合雑誌として著名なのは、「中央公論」、「改造」、「日本評論」、「文藝春秋」等である》（336頁）、刈矢昇天「総合雑誌の変質」（『日本学藝新聞』S15.5.10）で《普通に四大雑誌といふと、中央公論、改造、日本評論、文藝春秋のことらしい》（6面）、と位置づけられるなど⁽¹²⁾、少なくとも昭和19年の総合雑誌の整理⁽¹³⁾までは、こうした理解は広く共有されていたとみてよさそうである。しかも、昭和10年代という調査期間中、上の4誌は継続的に刊行されていたため、比較上の便宜もある。第3として、何を以て文芸時評とみなすかについて、まずは目次及び本文に「文芸時評」と明記されたもの、とする。その上で、主に前月号の雑誌に発表された創作やトピックを対象とした月評も、文芸時評に類するものとして、種別をしながら暫定的に拾っておく。その際には、執筆者や誌面上のレイアウトなど、前後する号との同一性なども考慮することとする。いずれにしても、同時代における作品受容やその評価軸を検討するための素材となること、そのために複数の作品やトピックに言及したもので、特定の作家・作品・テーマ論ではないこと、をゆるやかな選定条件として設定しておく（これらの条件については、今後、調査を積み重ねていく過程で、必要に応じて検討・修正を加えていく）。

おそらく、こうした作業を蓄積していくことは、さしあたり、昭和10年代における各紙誌の特徴や相関関係を明らかにし、文学場におけるモードの変遷を、現実的－物質的条件から浮き彫りにすることで、その具体的解明に寄与し得るだろう。また、時局－大文字の歴史との関係の中で、文学（者）のステータスを測定する目安にもなるはずだ⁽¹⁴⁾。さらに発展的には、ここでの報告自体は局所的なサンプルにとどまるが、これをベースに、文芸時評なる問題領域について考えるための一助ともしたい。

2

今回は、4大総合雑誌として、『中央公論』、『改造』、『文藝春秋』、『日本評論』を調査対象とし、昭

和 10 年代の刊行分における文芸時評の掲載状況を調査した。具体的には、文芸時評（および、それに類するもの）の有無を確認し、掲載されていた場合、当該記事の署名、タイトル・サブタイトル、掲載号、掲載ページ、当該号の総ページ、価格を確認した。

肝心の、“何を以て文芸時評とするか”については、上にも記したとおり、原則として目次または本文冒頭のタイトル・サブタイトルいずれかにおいて「文芸時評」と明記されたものを基準とした。他に、参考という意味あいから、月評として、前月の雑誌に関わるさまざまな作家・作品・トピックを論じた記事や、文芸時評とごく近い誌面構成をとった記事なども拾うこととした。

このようにしてまとめた、以下に掲出する [表 1]～[表 4] の項目について、説明しておく。「種別」は、「文芸時評」と明示されていれば◎、明示はないものの、それに類すると判断できたものは○、月評形式をとった文学・文壇関連記事は▲と記した。「署名」は記事に付された書き手に関する情報で、匿名や無署名も含めて、原文記載通りとした。「題名」は、記事のタイトル・サブタイトルを、これも本文の表記に従って記した。目次と異なるケースも散見されたが、その場合は本文冒頭の記載を採った。「掲載月」は、当該記事が掲載された雑誌の奥付の刊行年月を、昭和を「S」と略記して示した（例「S10-01」は昭和 10 年 1 月号の意）。「掲載頁」は、当該記事掲載範囲をページ数で示した。分量比は、当該雑誌の総ページ数を分母、当該記事の掲載ページ数を分子として、誌面全体に文芸時評が占める割合を示した。なお、その際、当該記事が何段で文字組みされていたかも括弧内に数字で示した（例「(2)」は 2 段組みの意）。「価格」は当該号の価格を、単位を円として示した（例「1」は 1 円、「0.8」は 80 銭の意）。

2-1：『中央公論』

長らく文学者にとっての檜舞台と思われてきた『中央公論』は、こと大正期、同誌への掲載が《新人作家のパスポートの観を呈した》⁽¹⁵⁾と評されるほどのステータスを誇った。昭和 10 年代を下ってもなお、限られた誌面の中、創作が掲載されつづけていく一方、文芸時評関連記事の掲載はきわめて少ない。『中央公論』の昭和 10 年代における文芸時評（および、それに類するもの）の掲載状況については、下記の [表 1] にまとめた。

[表 1 (『中央公論』)]

種別	署名	題名	掲載月	掲載頁	分量比	価格
◎	正宗白鳥	文芸時評——「瘡」を読んで——	S10-01	202-208	7/616 (2)	1
◎	正宗白鳥	新進作家論——(文芸時評)——	S10-03	177-187	11/512 (2)	0.8
◎	正宗白鳥	文芸時評	S10-09	169-176	8/528 (2)	0.8
◎	正宗白鳥	文芸時評	S10-12	241-249	9/528 (2)	0.8
◎	正宗白鳥	文芸時評	S11-02	123-133	11/532 (2)	0.8
◎	正宗白鳥	文芸時評	S11-03	313-322	10/536 (2)	0.8
◎	正宗白鳥	文芸時評	S11-04	435-442	8/672 (2)	1
◎	正宗白鳥	文芸時評	S11-05	324-333	10/524 (2)	0.8
◎	正宗白鳥	文芸時評	S11-06	315-321	7/580 (2)	1
▲	中島健蔵	文芸展望台	S12-09	314-317	4/620 (4)	1.1
▲	高沖陽造	文芸展望台	S12-10	380-383	4/560 (4)	1
▲	藤原定	文芸展望台	S12-11	368-371	4/580 (4)	1

▲	寛清	文芸展望台	S12-12	350-353	4/588 (4)	1
▲	小熊秀雄	文芸月評	S14-04	328-329	2/532 (4)	1.2
▲	矢崎弾	文芸月評	S14-06	394-395	2/624 (4)	1.2
◎	中島健蔵	文学時評 純粹か現実か	S14-08	347-353	7/532 (2)	1
▲	高沖陽造	文芸月評	S14-09	304-305	2/608 (4)	1.2
▲	北原武夫	文芸月評	S14-10	236-237	2/628 (4)	1.2
◎	岩上順一	描かれたる現実 文芸時評	S14-10	436-443	8/628 (2)	1.2
▲	井上友一郎	文芸月評	S14-11	450-451	2/528 (4)	1
▲	古谷綱武	文芸月評	S14-12	296-297	2/512 (4)	1
◎	青野季吉	文学の混迷 文芸時評	S15-01	430-437	8/668 (2)	1.5
◎	青野季吉	作家の凝視 文芸時評	S15-02	270-277	8/528 (2)	1.2
◎	青野季吉	新作家論 文芸時評	S15-03	262-269	8/464 (2)	1
◎	岩上順一	考へる世代 文芸時評	S15-04	238-245	8/532 (2)	1.2
◎	岩上順一	生活の論理 (文芸時評)	S15-05	204-212	9/448 (2)	1
◎	岩上順一	運命の構造 文芸時評	S15-06	374-381	8/512 (2)	1.2
◎	窪川鶴次郎	文学的感動の根源 文芸時評	S15-07	407-416	10/512 (2)	1.2
◎	中村光夫	現代文化の心理 文芸時評	S15-08	302-313	12/432 (2)	1
◎	中村光夫	東京の文学 文芸時評	S15-09	330-341	12/432 (2)	1
◎	中村光夫	技巧の羞恥 文芸時評	S15-10	350-361	12/480 (2)	1.2
◎	窪川鶴次郎	文学の理想 文芸時評	S15-11	252-260	9/400 (2)	1
◎	窪川鶴次郎	文学の原則 文芸時評	S15-12	242-251	10/400 (2)	1
◎	清水幾太郎	深淵から 文芸時評	S16-01	331-338	8/512 (2)	1.3
◎	清水幾太郎	責任ある思惟 文芸時評	S16-02	257-264	8/400 (2)	1
◎	中野好夫	孤高の精神 文芸時評	S16-03	317-324	8/480 (2)	1.2
◎	中野好夫	二つの文学 文芸時評	S16-04	378-386	9/496 (2)	1.2
◎	除村吉太郎	現代の文学意識について	S16-10	242-255	14/436 (2)	1.2
◎	大井廣介	文学の実体 文芸時評	S16-11	193-201	9/304 (2)	0.9
◎	小田切秀雄	間隙の克服 時代と個人とのずれの 文学的処理 (文芸時評)	S17-02	234-243	10/288 (2)	0.9

*昭和19年7月号まで刊行。

昭和10年代の『中央公論』を通覧したところ、30本の「文芸時評」に、「文芸展望台」・「文芸月評」をあわせてものべ40本の文芸時評関連記事が掲載されたのみであった。また、掲載期間も短く、昭和11~12年、昭和14~16年に集中的に掲載された。執筆者に関していえば、前者は正宗白鳥が一貫して筆を執り、後者は青野季吉、岩上順一、窪川鶴次郎、中村光夫など、文芸評論家が連続して担当することが多かった。「文芸展望台」、「文芸月評」についても、署名記事として、文芸評論家が担当した。

「文芸時評」は2段組み・10ページ前後の充実した紙幅の中で、(文壇動向よりも)評者の興味に即した議論が展開されている。「文芸展望台」は4段組み・4ページで構成され、作品評よりも、タイト

ル通り文壇トピックが中心であるのに対し、「文芸月評」は4段組み・2ページで構成される作品月評から成っている。

2-2：『改造』

『中央公論』と並んで、文学者にとってその創作欄が高いステータスを誇ってきた『改造』は、昭和10年代に入ると、火野葦平「麦と兵隊」(S13.8)や上田廣「建設戦記」(S14.4)といった、戦争文学の代表作を掲載してその存在感を誇った。『改造』の昭和10年代における文芸時評(および、それに類するもの)の掲載状況については、下記の[表2]にまとめた。

[表2 (『改造』)]

種別	署名	題名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁 (段組数)	価格
▲	無署名	文壇寸評	S10-01	336-337	2/656 (4)	1
▲	無署名	文壇寸評	S10-02	350-351	2/600 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-03	150-151	2/600 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-04	162-163	2/648 (4)	1
▲	無署名	文壇寸評	S10-05	314-315	2/560 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-06	320-321	2/568 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-07	402-403	2/656 (4)	1
▲	無署名	文壇寸評	S10-08	254-255	2/552 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-09	262-263	2/560 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-10	260-261	2/672 (4)	1
▲	無署名	文壇寸評	S10-11	162-163	2/536 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S10-12	190-191	2/560 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-01	270-271	2/672 (4)	1
▲	無署名	文壇寸評	S11-02	82-83	2/560 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-03	82-83	2/544 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-04	392-393	2/664 (4)	1
▲	無署名	文壇寸評	S11-05	296-297	2/544 (4)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-06	294-295	2/544 (3)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-07	364-365	2/640 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S11-08	344-345	2/576 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S11-09	358-359	2/560 (3)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-10	326-327	2/672 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S11-11	260-261	2/672 (3)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S11-12	250-251	2/568 (3)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S12-01	364-365	2/768 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S12-02	256-257	2/544 (3)	0.8

▲	無署名	文壇寸評	S12-03	238-239	2/512 (3)	0.8
▲	無署名	文壇寸評	S12-04	278-279	2/608 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S12-05	156-157	2/608 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S12-06	172-173	2/528 (3)	0.9
▲	無署名	文壇寸評	S12-07	92-93	2/576 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S12-08	254-255	2/528 (3)	1
▲	無署名	文壇寸評	S12-09	258-259	2/624 (3)	1
◎	豊島與志雄	文学の肯定面について —— 文芸時評 ——	S14-07	201-208	8/672 (2)	1.2
◎	豊島與志雄	文学の形象について —— 文芸時評 ——	S14-08	267-273	7/672 (2)	1.2
◎	青野季吉	文学と作者の本心など —— 文芸時評 ——	S14-09	70-77	8/560 (2)	1
◎	青野季吉	文学と作家の間 (文芸時評)	S14-10	131-137	7/640 (2)	1.2
◎	杉山平助	文芸時評	S15-08	288-299	12/464 (2)	1
◎	杉山平助	文芸時評	S15-09	262-273	12/464 (2)	1
◎	杉山平助	文芸時評	S15-10	209-221	13/448 (2)	1
◎	森田草平	新春の短篇小説 —— 文芸時評 ——	S16-02	300-307	8/432 (2)	1
◎	川端康成	文芸時評	S16-03	310-332	23/432 (2)	1
◎	保田與重郎	古典追求の甘さ [文芸時評]	S17-12	126-131	6/208 (2)	0.9
◎	芳賀檀	新しい人間像について [文芸時評]	S18-01	195-197	3/256 (2)	1

*昭和19年6月号まで刊行。

昭和10年代の『改造』を通覧すると、「文芸時評」は11本しか掲載されておらず、33本の「文壇寸評」とあわせても、のべ44本の文芸時評関連記事が掲載されたのみであった。また、複数本が掲載された年は、昭和14～16年に限られた。執筆者は、文学者や文芸評論家で、幅広い世代の執筆者が担当した。無署名記事「文壇寸評」は、昭和10～12年下半期まで、3段または4段組み・見開き2ページで継続的に掲載され、文壇動向が論評された。

2-3: 『文藝春秋』

大正12年1月の創刊当初、随筆雑誌／雑文雑誌として出発した『文藝春秋』は、しかしその後、大正12年5月号から創作を掲載しはじめ、大正15年11月号からは政治記事も掲載するようになり、次第に総合雑誌への転身を果たしていった⁽¹⁶⁾。『文藝春秋』の昭和10年代における文芸時評（および、それに類するもの）の掲載状況については、下記の〔表3〕にまとめた。

〔表3 (『文藝春秋』)〕

種別	署名	題名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁 (段組数)	価格
◎	佐藤春夫	文芸ザツクバラン —— 文芸時評 ——	S10-01	174-184	11/516 (3)	0.6

◎	佐藤春夫	文芸ザックバラン (二) — 文芸時評 —	S10-02	148-153	6/352 (3)	0.4
◎	佐藤春夫	文芸ザックバラン (三) — 文芸時評 —	S10-03	112-119	8/420 (3)	0.5
◎	佐藤春夫	文芸ザックバラン (四) — 文芸時評 —	S10-04	128-135	8/432 (3)	0.5
◎	佐藤春夫	文芸ザックバラン (おしまひ) — 文芸時評 —	S10-05	76-82	7/360 (3)	0.4
◎	川端康成	文芸時評	S10-06	122-130	9/416 (3)	0.5
◎	川端康成	文芸時評	S10-07	140-143	4/424 (3)	0.5
◎	川端康成	文芸時評	S10-08	214-217	4/516 (3)	0.6
◎	川端康成	文芸時評	S10-10	82-86	5/424 (3)	0.5
◎	川端康成	文芸時評	S10-11	164-171	8/424 (3)	0.5
◎	川端康成	文芸時評	S10-12	70-78	9/416 (3)	0.5
◎	豊島與志雄	文芸時評	S11-01	196-202	7/512 (3)	0.6
◎	豊島與志雄	文芸時評	S11-02	70-79	10/424 (3)	0.5
◎	豊島與志雄	文芸時評	S11-03	94-101	8/432 (3)	0.5
◎	林房雄	文芸時評	S11-04	162-171	10/512 (3)	0.6
◎	林房雄	文芸時評	S11-05	94-103	10/432 (3)	0.5
◎	林房雄	文芸時評	S11-06	78-87	10/432 (3)	0.5
◎	室生犀星	文芸時評	S11-07	120-128	9/512 (3)	0.6
◎	室生犀星	文芸時評	S11-08	198-207	10/512 (3)	0.6
◎	室生犀星	文芸時評	S11-09	88-95	8/420 (3)	0.5
◎	森山啓	ヒューマニズム論議 — 文芸時評 —	S11-10	158-164	7/516 (3)	0.6
◎	中村光夫	癩者の復活 — 文芸時評 —	S11-11	248-257	10/432 (3)	0.5
◎	伊藤整	作家は何を為し得るか — 文芸時評 —	S11-12	166-172	7/432 (3)	0.5
◎	中條百合子	ジイドとブラウダの批評 — 文芸時評 —	S12-02	138-145	8/448 (3)	0.5
◎	中條百合子	文学における日本的なるもの — 文芸時評 —	S12-03	226-233	8/528 (3)	0.6
◎	中條百合子	ヒューマニズムへの道 — 文芸時評 —	S12-04	182-191	10/528 (3)	0.6
◎	谷川徹三	文学と民衆 並びに国民文学の問題 — 文芸時評 —	S12-05	172-180	9/432 (3)	0.5
◎	谷川徹三	政治の文学支配について — 文芸時評 —	S12-06	214-221	8/432 (3)	0.5
◎	谷川徹三	国語の諸問題 (文芸時評)	S12-07	160-164	5/488 (3)	0.6

◎	村山知義	小説の演劇化映画化 — 文芸時評 —	S12-08	92-199	8/464 (3)	0.6
◎	村山知義	八月の文芸など — 文芸時評 —	S12-09	146-152	7/464 (3)	0.6
◎	河上徹太郎	戦争と文学 — 文芸時評 —	S12-10	230-235	6/464 (3)	0.6
◎	中野重治	ルポルタージュについて — 文芸時評 —	S12-11	362-367	6/464 (3)	0.6
◎	萩原朔太郎	日本語の不自由さ — 文芸時評 —	S12-12	392-398	7/464 (3)	0.6
◎	正宗白鳥	文芸時評	S13-02	408-411	4/464 (3)	0.6
◎	武者小路実篤	文芸時評	S13-03	366-369	4/472 (3)	0.6
◎	武者小路実篤	文芸時評	S13-04	406-412	7/464 (3)	0.6
◎	武者小路実篤	文芸時評	S13-05	396-402	7/464 (3)	0.6
◎	武者小路実篤	文芸時評	S13-06	356-362	7/464 (3)	0.6
◎	阿部知二	文学への信念 — 文芸時評 —	S13-07	336-343	8/464 (3)	0.6
◎	阿部知二	文学の読者 — 主として青年について —	S13-08	304-311	8/512 (3)	0.7
◎	阿部知二	時局と文学 — 文芸時評 —	S13-09	138-145	8/496 (3)	0.7
◎	岡崎義恵	現代文芸の解剖 — 文芸時評 —	S13-10	340-347	8/480 (3)	0.7
◎	武田麟太郎	小説精神の探求 — 文芸時評 —	S13-11	334-338	5/432 (3)	0.7
◎	武田麟太郎	小説「土と兵隊」 — 文芸時評 —	S13-12	320-326	7/400 (3)	0.6
◎	川端康成	今日の小説 — 文芸時評 —	S14-01	254-258	5/432 (3)	0.7
◎	川端康成	文学の嘘について — 文芸時評 —	S14-02	350-357	8/432 (3)	0.7
◎	川端康成	徳田秋声氏の「仮装人物」 — 文芸時評 —	S14-04	336-345	10/432 (3)	0.7
◎	川端康成	小説と批評 — 文芸時評 —	S14-05	348-354	7/432 (3)	0.7
◎	川端康成	作家に就て — 文芸時評 —	S14-06	324-328	5/432 (3)	0.7
◎	片岡鐵兵	戦争と人間発見 — 文芸時評 —	S14-07	356-359	4/432 (3)	0.7
◎	片岡鐵兵	構成への意力 — 文芸時評 —	S14-08	354-358	5/432 (3)	0.7
◎	片岡鐵兵	呪はれた才能 — 文芸時評 —	S14-09	338-342	5/480 (3)	0.8
◎	小林秀雄	言葉について — 文芸時評 —	S14-10	380-384	5/432 (3)	0.7
◎	小林秀雄	学者と官僚	S14-11	326-331	6/432 (3)	0.7
◎	小林秀雄	イデオロギイの問題	S14-12	342-349	8/432 (3)	0.7
◎	林房雄	日本歴史の勉強に就いて — 文芸時評 —	S15-02	282-290	9/352 (3)	0.6
◎	林房雄	帰還作家の問題 — 文芸時評 —	S15-03	338-343	6/432 (3)	0.7
◎	林房雄	東洋の作家たち — 文芸時評 —	S15-04	358-364	7/432 (3)	0.7
◎	林房雄	現代文学の衰弱 (文芸時評)	S15-05	360-369	10/432 (3)	0.7
◎	片岡鐵兵	文芸時評 動機の問題 作品と題材	S15-06	334-340	7/416 (3)	0.7

◎	三枝博音	文芸時評 私の文学危機感	(同上)	(同上)	(同上) ⁽¹⁷⁾	0.7
◎	小林秀雄	文芸時評 処世家の理論	(同上)	(同上)	(同上)	0.7
◎	河上徹太郎	文芸時評 現代日本の短篇小説	S15-07	356-363	8/416 (3)	0.7
◎	眞船豊	文芸時評 純粹なもの	(同上)	(同上)	(同上)	0.7
◎	窪川稲子	文芸時評 作者の表情	(同上)	(同上)	(同上)	0.7
◎	關口次郎	文芸時評 戯曲形式の変遷	S15-08	350-355	6/416 (3)	0.7
◎	中山義秀	文芸時評 世界的な神経	(同上)	(同上)	(同上)	0.7
◎	廣津和郎	文芸時評 感心した作品	(同上)	(同上)	(同上)	0.7
◎	高見順	羞恥なき文学——文芸時評——	S15-09	360-366	7/416 (3)	0.7
◎	高見順	心情の論理——文芸時評——	S15-10	344-349	6/416 (3)	0.7
◎	高見順	日本文学者の会の成立 ——文芸時評——	S15-11	300-304	5/352 (3)	0.6
◎	高見順	反俗と通俗——文芸時評——	S15-12	308-314	7/352 (3)	0.6
◎	小林秀雄	島木健作論——文芸時評——	S16-02	220-223	4/352 (3)	0.6
◎	小林秀雄	林房雄について——文芸時評——	S16-03	326-330	5/400 (3)	0.7
◎	尾崎士郎	悲願に立つ文学——文芸時評——	S16-04	292-298	7/352 (3)	0.6
◎	河上徹太郎	文化行政といふこと ——文芸時評——	S16-07	246-254	9/336 (3)	0.6
◎	河上徹太郎	小説の中の「私」——文芸時評——	S16-08	270-276	7/336 (3)	0.6
◎	河上徹太郎	思考の貧困——文芸時評——	S16-09	216-222	7/336 (3)	0.6

*昭和20年3月号まで刊行。

昭和16年末以降掲載されることはないものの、昭和10年代における『文藝春秋』を通覧すれば、総合雑誌の中で、最も多く「文芸時評」が持続的かつ精力的に掲載された媒体だといえる。総じて79本の「文芸時評」が掲載されたが、昭和10年代・10年分の月刊誌を120冊と単純に想定した場合、実に、3分の2程度の割合で「文芸時評」を掲載していた計算になる。

執筆者に関していえば、川端康成が11回、林房雄が7回、小林秀雄が6回、河上徹太郎が5回、と『文学界』系の文学者・文芸評論家の登場が多い。1人の執筆者が3～5回程度連続して担当することも多く、また紙幅も3段組み・4～11ページと多く、書き手がじっくりと自己の文学観を示しながら作品批評をすることが可能だった。

2-4：『日本評論』

大正15年に創刊された『経済往来』は、昭和10年10月号より『日本評論』と改題されるが、その間に、「経済雑誌から総合雑誌へ」という変化が観察できる」という。具体的な指標としては、昭和8～10年にかけて、「経済以外に政治・思想・文化など多ジャンルにわたる各種評論が同列的に掲載されること」、「創作の充実が達成されること」を達成し、総合雑誌としての内実を整えた⁽¹⁸⁾。つまり、『日本評論』とは、文芸方面を強化するという志向性をもって昭和10年代を迎えた総合雑誌なのだ。『日本評論』の昭和10年代における文芸時評（および、それに類するもの）の掲載状況については、下記の〔表4〕にまとめた。

[表4 (『日本評論』)]

種別	署名	題名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁 (段組数)	価格
▲	無署名	文壇時言	S10-12	248-249	2/560 (3)	0.8
▲	無署名	文壇時言	S11-03	246-247	2/392 (3)	0.6
◎	A・K・A	匿名文芸時評	S11-10	226-330	5/518 (3)	0.8
◎	A・K・A	匿名文芸時評	S11-12	330-334	4/520 (3)	0.8
◎	A・K・A	匿名文芸時評	S12-01	427-432	6/528 (3)	1
○	S・O・S	現文壇大家論 (文壇時評)	S12-02	373-379	7/480 (3)	0.8
◎	A・K・A	匿名文芸時評 宇野浩二のモデル問題	S12-03	292-297	6/504 (3)	0.8
○	S・O・S	藤村の国際ペン大会報告 (文壇時評)	S12-04	279-283	5/608 (3)	1
◎	A・H・O	「文学界」をめぐる (文芸時評)	S12-05	403-409	7/480 (3)	0.8
◎	A・H・O	文学者の経済生活 (文芸時評)	S12-06	372-376	5/544 (3)	0.9
◎	A・H・O	文学者と素朴な人間性 (文芸時評)	S12-07	358-362	5/608 (3)	1
◎	A・H・O	渇きの時代——文芸時評——	S12-08	220-224	5/464 (3)	0.9
◎	A・H・O	懇話会賞と芥川賞 (文芸時評)	S12-09	409-414	6/496 (3)	0.9
◎	A・H・O	戦時体制下の文学 (文芸時評)	S12-10	417-422	6/576 (3)	1
◎	A・H・O	三七年度の文学的回想 (文芸時評)	S12-12	330-336	7/448 (3)	1
◎	A・B・C	文芸批評家批判 (文芸時評)	S13-01	344-351	8/464 (2/3) ⁽¹⁹⁾	1
◎	A・B・C	文壇行状記 (文芸時評)	S13-02	340-349	10/496 (2/3)	0.9
○	A・B・C	匿名時評 文芸 日本文学に欠けたるもの	S13-03	290-219	11/448 (2/3)	1
○	A・H・O	匿名時評 文芸 長閑な文壇	S13-05	314-323	10/528 (2/3)	0.9
○	A・H・O	匿名時評 文芸 知識階級と日本主義	S13-06	425-433	9/672 (2/3)	1.2
○	A・H・O	匿名時評 文芸 国策と文学者	S13-07	282-291	10/576 (2/3)	1
○	A・H・O	匿名時評 文芸 時局下の大衆文芸	S13-08	344-353	10/512 (2/3)	0.9
○	A・H・O	匿名時評 文芸 芥川賞	S13-09	270-279	10/496 (2/3)	0.9
○	A・H・O	匿名時評 文芸 従軍ペン部隊の出陣	S13-10	311-316	6/512 (3)	0.9
○	A・H・O	匿名時評 文芸 創作界を抉ぐる	S13-11	268-275	8/432 (3)	1
○	A・H・O	匿名時評 文芸 本年度文壇棚ざらへ	S13-12	225-234	10/544 (3)	1
○	J・I・N	匿名時評 文芸 新春文壇	S14-01	218-224	7/584 (3)	1

◎	J・I・N	文芸時評 文芸出版の珍事情	S14-02	165-171	7/416 (3)	1
◎	J・I・N	文芸時評 女流作家の当り年	S14-03	284-287	4/544 (3)	1
○	J・I・N	匿名時評 文壇 創造的精神の喪失	S14-04	245-256	12/512 (2/3)	1
○	J・I・N	匿名時評 文壇 来るべき文学の新風	S14-05	326-334	9/512 (3)	1
○	J・I・N	匿名時評 文壇 長篇悪作の横行	S14-06	210-219	10/496 (3)	1
○	M・G・M	文壇匿名時評 受胎期に在る文学	S14-07	164-175	12/544 (3)	1
○	M・G・M	文壇匿名時評 詩精神と散文精神	S14-08	274-281	8/480 (3)	1
○	M・G・M	文壇匿名時評 海洋文学は出るか?	S14-09	300-308	9/480 (3)	1
○	M・G・M	文芸 匿名時評 満人作家の作品検討	S14-10	277-285	9/480 (3)	1
○	M・G・M	文芸 匿名時評 文芸時評の批評	S14-11	368-376	10/480 (3)	1.2
○	M・G・M	文芸 匿名時評 文壇回顧一年	S14-12	184-196	13/400 (3変)	0.9
◎	中野重治	文学における文学と人間との問題 (文芸時評)	S15-02	335-346	11/464 (2)	1
◎	中野重治	世俗と文学の世界	S15-03	186-192	7/416 (2)	1
◎	中野重治	作と作中の問題 (文芸時評)	S15-04	370-379	10/616 (3)	1.5
◎	青野季吉	評論の新人について	S15-05	276-282	7/400 (3)	1.2
◎	青野季吉	小説の第一義 (文芸時評)	S15-06	266-272	7/352 (2)	1
◎	青野季吉	小説の陥穽 (文芸時評)	S15-07	294-300	7/416 (2)	1
◎	窪川鶴次郎	文芸時評 時代と文学	S15-08	314-322	9/400 (2)	1
◎	窪川鶴次郎	文芸時評 文学的意識の行方	S15-09	294-299	6/400 (2)	1
◎	窪川鶴次郎	文芸時評 文学の宿命	S15-10	236-244	9/359 (2)	0.9
◎	阿部知二	文芸時評	S15-11	251-256	7/352 (2)	0.9
◎	阿部知二	文芸時評	S15-12	291-296	7/352 (2)	0.9
◎	河上徹太郎	文芸時評	S16-01	234-240	7/416 (2)	1
◎	河上徹太郎	文芸時評	S16-02	300-306	7/400 (2)	1
◎	河上徹太郎	文芸時評	S16-03	306-313	8/400 (2)	1
◎	河上徹太郎	文芸時評	S16-04	288-293	6/400 (2)	1
◎	河上徹太郎	文芸時評 — 文壇の一元化について —	S16-05	320-326	7/400 (2)	1
◎	河上徹太郎	文芸時評	S16-06	354-358	5/400 (2)	1
◎	中島健蔵	文芸時評	S16-07	286-291	6/368 (2)	1
◎	中島健蔵	文芸時評	S16-08	275-281	7/368 (2)	1
◎	中島健蔵	懐疑との闘争 — 文芸時評 —	S16-09	319-325	7/368 (2)	1
◎	中島健蔵	風変りな文学 — 文芸時評 —	S16-10	256-262	7/368 (2)	1
◎	中島健蔵	運命の寒熱 — 文芸時評 —	S16-11	244-250	7/288 (2)	0.9

◎	中島健蔵	芸術と科学——文芸時評——	S16-12	256-260	5/288 (2)	0.9
◎	岩上順一	歴史形成の主体——文芸時評——	S17-01	283-290	8/320 (2)	1
◎	岩上順一	内面の戦ひ(文芸時評)	S17-02	228-235	8/272 (2)	0.9
◎	岩上順一	道徳の序章 文芸時評	S17-03	240-247	8/272 (2)	0.9
◎	岩上順一	批評の諸相——文芸時評——	S17-04	241-248	8/272 (2)	0.9
◎	岩上順一	文学と倫理	S17-05	155-160	6/224 (2)	0.9
◎	岩上順一	文芸時評 芸術の論理	S17-06	174-181	8/224 (2)	0.9
◎	岩上順一	人間の確証	S17-07	183-188	6/224 (2)	0.9
◎	岩上順一	新人について	S17-08	121-128	8/224 (2)	0.9
◎	岩上順一	進路への展望	S17-09	172-178	7/224 (2)	0.9
◎	本多顕彰	文芸時評 文芸時評	S17-10	175-182	8/224 (2)	0.9
◎	本多顕彰	文芸時評	S17-11	130-137	8/224 (2)	0.9
◎	本多顕彰	文芸時評	S17-12	167-173	7/224 (2)	0.9
◎	佐々木基一	文学と時代(文芸時評)	S18-01	174-181	8/256 (2)	1
◎	佐々木基一	青春の文学(文芸時評)	S18-02	99-106	8/160 (2)	0.8
▲	佐々木基一	戦争文学について	S18-03	89-95	7/160 (2)	0.8
▲	黒岩一郎	現代新短歌論	S18-04	127-136	10/160 (2)	0.8
▲	中島健蔵	技術の喪失 ——小説の行き方に就いて——	S18-05	106-110	5/123 (2)	0.8

*昭和20年4・5月号まで刊行。

昭和10年代の『日本評論』を通覧すると、『中央公論』や『改造』に比して、精力的に「文芸時評」を掲載した総合雑誌であり、厳密に数えても52本、「匿名時評」等○印の26本を足すと、実に76本の文芸時評関連記事が掲載された。昭和14年末までは匿名記事が中心だが、昭和15年からは文芸評論家による文芸時評が継続的に掲載されていく。

匿名で書かれた「(文芸)時評」は、3段組み・6ページ前後を標準として、作品に網羅的な言及をするよりも、中心的な作品やトピックに特化した記事構成が特徴といえる。他方、実名となって以降の「文芸時評」は、2段組み・5～8ページ程度の紙幅の中、複数月に渡って同一の執筆者が担当し、書き手のカラーが出た記述となっている。

3

最後に、4大総合誌を調査対象として行った本稿の文芸時評(および、それに類するもの)に関する調査を、掲載状況に絞って改めて[表5]として掲出し、少しく考察をくわえておきたい。

「刊行年月」は、当該雑誌の奥付上の刊行年月を、昭和を「S」と略記して示した。また、各誌名欄の記号は、「文芸時評」と明示されていれば◎、明示はないものの、それに類すると判断できたものは○、月評形式をとった文学・文壇関連記事は▲と記し、掲載のない場合は一で示した。掲載誌数は、当該月に刊行されていた4大総合誌数を分母、そのうち、文芸時評(および、それに類するもの)が何かしらでも掲載されていた雑誌数を分子として、4誌全体の掲載状況を示した。

[表 5 (一覽)]

刊行年月	『中央公論』	『改造』	『文藝春秋』	『日本評論』	掲載誌数
S10-01	◎	▲	◎	—	3/4
S10-02	—	▲	◎	—	2/4
S10-03	◎	▲	◎	—	3/4
S10-04	—	▲	◎	—	2/4
S10-05	—	▲	◎	—	2/4
S10-06	—	▲	◎	—	2/4
S10-07	—	▲	◎	—	2/4
S10-08	—	▲	◎	—	2/4
S10-09	◎	▲	—	—	2/4
S10-10	—	▲	◎	—	2/4
S10-11	—	▲	◎	—	2/4
S10-12	◎	▲	◎	▲	4/4
S11-01	—	▲	◎	—	2/4
S11-02	◎	▲	◎	—	3/4
S11-03	◎	▲	◎	▲	4/4
S11-04	◎	▲	◎	—	3/4
S11-05	◎	▲	◎	—	3/4
S11-06	◎	▲	◎	—	3/4
S11-07	—	▲	◎	—	2/4
S11-08	—	▲	◎	—	2/4
S11-09	—	▲	◎	—	2/4
S11-10	—	▲	◎	◎	3/4
S11-11	—	▲	◎	—	2/4
S11-12	—	▲	◎	◎	3/4
S12-01	—	▲	—	◎	2/4
S12-02	—	▲	◎	○	3/4
S12-03	—	▲	◎	◎	3/4
S12-04	—	▲	◎	○	3/4
S12-05	—	▲	◎	◎	3/4
S12-06	—	▲	◎	◎	3/4
S12-07	—	▲	◎	◎	3/4
S12-08	—	▲	◎	◎	3/4
S12-09	▲	▲	◎	◎	4/4
S12-10	▲	—	◎	◎	3/4

S12-11	▲	—	◎	◎	3/4
S12-12	▲	—	◎	◎	3/4
S13-01	—	—	—	◎	1/4
S13-02	—	—	◎	◎	2/4
S13-03	—	—	◎	○	2/4
S13-04	—	—	◎	—	1/4
S13-05	—	—	◎	○	2/4
S13-06	—	—	◎	○	2/4
S13-07	—	—	◎	○	2/4
S13-08	—	—	◎	○	2/4
S13-09	—	—	◎	○	2/4
S13-10	—	—	◎	○	2/4
S13-11	—	—	◎	○	2/4
S13-12	—	—	◎	○	2/4
S14-01	—	—	◎	○	2/4
S14-02	—	—	◎	◎	2/4
S14-03	—	—	—	◎	1/4
S14-04	▲	—	◎	○	3/4
S14-05	—	—	◎	○	2/4
S14-06	▲	—	◎	○	3/4
S14-07	—	◎	◎	○	3/4
S14-08	◎	◎	◎	○	4/4
S14-09	▲	◎	◎	○	4/4
S14-10	◎・▲	◎	◎	○	4/4
S14-11	▲	—	◎	○	3/4
S14-12	▲	—	◎	○	3/4
S15-01	◎	—	—	—	1/4
S15-02	◎	—	◎	◎	3/4
S15-03	◎	—	◎	◎	3/4
S15-04	◎	—	◎	◎	3/4
S15-05	◎	—	◎	◎	3/4
S15-06	◎	—	◎	◎	3/4
S15-07	◎	—	◎	◎	3/4
S15-08	◎	◎	◎	◎	4/4
S15-09	◎	◎	◎	◎	4/4
S15-10	◎	◎	◎	◎	4/4

S15-11	◎	—	◎	◎	3/4
S15-12	◎	—	◎	◎	3/4
S16-01	◎	—	—	◎	2/4
S16-02	◎	—	◎	◎	3/4
S16-03	◎	◎	◎	◎	4/4
S16-04	◎	—	◎	◎	3/4
S16-05	—	—	—	◎	1/4
S16-06	—	—	—	◎	1/4
S16-07	—	—	◎	◎	2/4
S16-08	—	—	◎	◎	2/4
S16-09	—	—	◎	◎	2/4
S16-10	◎	—	—	◎	2/4
S16-11	◎	—	—	◎	2/4
S16-12	—	—	—	◎	1/4
S17-01	—	—	—	◎	1/4
S17-02	◎	—	—	◎	2/4
S17-03	—	—	—	◎	1/4
S17-04	—	—	—	◎	1/4
S17-05	—	—	—	◎	1/4
S17-06	—	—	—	◎	1/4
S17-07	—	—	—	◎	1/4
S17-08	—	—	—	◎	1/4
S17-09	—	—	—	◎	1/4
S17-10	—	—	—	◎	1/4
S17-11	—	—	—	◎	1/4
S17-12	—	◎	—	◎	2/4
S18-01	—	◎	—	◎	2/4
S18-02	—	—	—	◎	1/4
S18-03	—	—	—	▲	1/4
S18-04	—	—	—	▲	1/4
S18-05	—	—	—	▲	1/4
S18-06	—	—	—	—	0/4
S18-07	—	—	—	—	0/4
S18-08	—	—	—	—	0/4
S18-09	—	—	—	—	0/4
S18-10	—	—	—	—	0/4

S18-11	—	—	—	—	0/4
S18-12	—	—	—	—	0/4
S19-01	—	—	—	—	0/4
S19-02	—	—	—	—	0/4
S19-03	—	—	—	—	0/4
S19-04	—	—	—	—	0/4
S19-05	—	—	—	—	0/4
S19-06	—	—	—	—	0/4
S19-07	—		—	—	0/3
S19-08			—	—	0/2
S19-09			—	—	0/2
S19-10			—	—	0/2
S19-11			—	—	0/2
S19-12			—	—	0/2
S20-01			—	—	0/2
S20-02			—	—	0/2
S20-03			—	—	0/2
S20-04					0/0
S20-05				—	0/1

*網掛け部分は、当該雑誌の刊行なし。

この表によって、昭和10年代における4大総合雑誌の文芸時評（および、それに類するもの）の掲載状況を通覧してみよう。

第1に気づかされるのは、4誌揃い踏みで「文芸時評」が掲載されたのは、昭和15年8～10月号の3ヶ月分しかなく、創作発表の檜舞台と目されていた総合雑誌が、必ずしも文芸時評関連記事の掲載には熱心ではなかった、という事実である（文芸時評関連記事が4誌に並んだ機会も、昭和10年12月号、昭和12年9月号、昭和16年3月号の3度きりであった）。

第2として、戦争末期に各誌の刊行がストップする以前、4大総合雑誌に関していえば、昭和18年初頭にはすでに文芸時評の掲載がみられなくなっていた。このことは、文芸時評が創作の評価－位置づけという機能を果たしてきた事実から捉え直せば、文学史上における転換点と目されてきた1945年8月以前に、可視化された検閲や廃刊等を待つまでもなく、文学場（の機能）においては基底的な変質が起きていたことを示す。もちろん、ここには創作をはじめ、文学場全体のパイの縮小（紙不足による雑誌のページ減）といった事態の進行も考え合わせる必要があるが、創作に先立って文芸時評が消えていったことは明らかな事実である。

第3として、文芸時評関連記事が集中的に掲載された時期として、昭和10～12年、昭和14～15年があげられる。このことは、文芸時評のみに限られた動向というより、文学場全体の具体的な展開／機運と連動した現象にみえる。そうであれば、文芸時評自体は、文学場のどのような局面を指し示すバロメーターなのか、今後検討を重ねていきたい。

もとより、いずれの点についても、今後、文芸誌や新聞学芸欄上の文芸時評関連記事も調査した上

で、文学場の表面的／潜在的な動きにも配慮しながら、昭和10年代における文芸時評（の消長）の歴史的意味について、多角的な検討を進めていくことにしたい。

注

- (1) 藤田三男「『文芸時評』に憑かれて」（『日本古書通信』2006.1），2頁。
- (2) 藤田三男「仕事の周辺 「文芸時評大系」のこと」（『季刊文科』2010.8），95頁。
- (3) 中島国彦「『文芸時評』への一視点——ゆまに書房『文芸時評大系』の編集に参加して——」（『日本近代文学』2007.5），258頁。
- (4) 猪野謙二「文芸時評」（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第四巻』講談社，1977），471頁。
- (5) 谷沢永一「『文芸時評』ことはじめ」（『新潮45』2002.1），203頁。
- (6) 注（5）に同じ，202頁。
- (7) 注（5）に同じ，206頁。
- (8) 大澤聡『批評メディア論』（岩波書店，2015），85頁。
- (9) 山本芳明「文芸時評が持つ流動性と断層」（『週刊読書人』2006.7.7），10面。
- (10) 注（3）に同じ，263頁。
- (11) 拙著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会，2015），特に「序」参照。
- (12) 大澤聡「『編輯』と『総合』 研究領域としての雑誌メディア」（吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの戦後文化史——変貌する戦後パラダイム』森話社，2012）参照。
- (13) 日本出版会によるこの整理を受けて，1944年4月号から「総合雑誌」は『中央公論』，『現代』，『公論』の3誌となる。それに伴い，『改造』は「時局雑誌」，『文芸春秋』は「文芸雑誌」，『日本評論』は「経済雑誌」となる。併せて，大串兎代夫「総合雑誌論」（『日本評論』1943.3）参照。
- (14) 拙論「昭和一〇年代における文芸時評・序説」（『ゲストハウス』2016.9）において，《昭和一〇年前後（以降）の文芸時評とは，文学場内／外^{オフセッション}の関係を考え，あるいは社会性という強迫観念ともとれる概念を考える際の急所》（17頁）だと指摘した。
- (15) 友野代三「中央公論」（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第五巻』講談社，1977），263頁。
- (16) 保昌正夫「文芸春秋」（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第五巻』講談社，1977），381頁。
- (17) この月は，文芸時評という枠組みの中に，3人の執筆者による3つの記事が，334～340ページにかけて掲載されたため，表には「(同上)」と示した。昭和15年8月号，9月号も同様。なお，記事数としては，1冊の雑誌に3本掲載と数えた。
- (18) 大澤聡「雑誌『経済往来』の履歴——誌面構成と編集体制——」（『メディア史研究』2009.5），74頁，85頁。
- (19) 「(2/3)」は，3段組中，上2段が文芸時評掲載スペースであることを示す。以下同。

Survey results on reviews in monthly literary magazines
in the second decade of the Showa era (I)

— General magazine (“Chuoukouron”, “Kaizo”, “Bungeishunjuu” and “Nihonhyouron”)

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

In this paper, I conducted a survey on reviews in monthly literary magazines in the second decade of the Showa era. The survey focused on the four types of general magazines (“Chuoukouron”, “Kaizo”, “Bungeishunjuu” and “Nihonhyouron”). After introducing the research situation on the reviews, I obtained data on the posting situation of that 10 years. As a result, I found that review postings were less than expected. In addition, two years earlier than the end of the war, I also found that the reviews had disappeared from those magazines.